

追悼・顕彰の事跡

大正14年

海野長頸子君

苦笑して死んでしまひし梅雨かな 水巴

悼 長頸子君

夏木立吹くや君と拝まん星もなく 青陽人

豊島巴汀 由比

謹んで哀悼の意を捧げます。

然し俳句の上に文章の上に美しかった生前の感情は私の生涯消えることではありません。ですから私達の友達としていつまでも生きてゐます。

今朝もおもへば相語るこゝろ露涼し 水巴

長頸子兄を喪ひ感無量に御座候。昨日は告別式に参列、御弔句は涛衣君謹誦仕候。小生今迄にかゝる心持よき葬儀は始めてに御座候。寺は縁とりくゝに茂りまことに心持よく有之候。令弟欣也君の容姿生前の長頸子兄に彷彿致し来りしを見て一人思ひ出を深め申候。いづれ小生ら故人に知縁ありしものみにてき、やかにても追悼句会催し度存居候。

五月二十五日

余石

右は私宛の書信の一節です。初夏の静かにすがすがしい告別式の景情が窺はれて嬉しい事でした。敢て御披露致所以です。(水巴)

(大正14年・曲水10-7)

(8月10日前後?)

鈴木三千代宛書信

亮之助

(前略) 四月、五月、六月、七月、この間の事は、どれからかいてよいかさっぱりわからない。書くには余りに哀しい痛ましいことであるからネ。兄さんの死、もう再び悲しみさせたくない、お前には私以上痛烈な悲劇であるからネ。相離れてゐて、相見ず、知らず別れた人を思ふだけでもたまらぬのに、………今はかれこれ死の兄のことは書くのをさげやう、いづれ相会ふてしみく亡き兄を偲ぶ折も来やうからネ。私にしても、どうしても死んだとは思へぬ、まだく生きてゐるやうな氣である、たゞ折々人の口から悲しみを言はれて涙をそゝる位だ。先日こんな事があつた。ラジオ放送で児童の時に兄さんの童謡を全部やってくれた。そして特に終りにこの若い天才詩人はおしくもつい先日死んだとまでつけ加へてくれたのにはたいへんうれしく思はれた。死んでからだんく光つてくる。いま「日南の家」と云ふ六十枚程の戯曲を曲水十月号へ発表するため浄書をいそいでゐる。

なんとかして兄のためにと毎日そのみ念頭においてゐる。きつと近い将来には童謡なりを出版する考へである。(後略)

(この手紙の終りは、「三千代殿 亮」とあり、そのあと便